
クルトゥース ～碧槍の帝～

高田 玄武

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

クルトウース ～碧槍の帝～

【Nコード】

N8321C

【作者名】

高田 玄武

【あらすじ】

自他共に認める、極々平凡な男子高校生。或る日、脈絡もなく起こった異常事態に混乱する主人公は、不思議な少女と出会う

「碧槍の帝」

まずはどこから説明すべきか。

俺はとにかく普通をモットーに生きる、そりゃあもうどこにでも居る極々一般的な高校生だ。映画で言うならエンディングロールで「市の皆さん」、なんてその他大勢に分類されるべき、いや寧ろそれを望んで毎日を送っていた。送っていたはずだった。

なのに・・・神様、俺が何かしましたか！？気に入らないことをしたというなら謝ります！ちゃんと賽銭箱にも一円玉じゃなくて十円玉、いや、どうしてもって言うなら五百円玉を泣く泣く奮発します！ほんとーは嫌だけどっ！！ですから！どうぞ機嫌を直して、この俺に元の平凡で平和な毎日を返しやがってください！！

・・・いや、別にこの時の俺は、それを冗談のつもりでもなく、ましてや皮肉で願ったわけでもない。至って大真面目だ。ただし、この時点ですでに、願うべき相手を間違ってしまったわけだから。

今日も朝から降り続いた雨は止む気配が無い。もともと、六月の最中だっていうのに梅雨をモノともせずにかんかん照りが続けば、お百姓さんは大変だし何しろ異常だ。そう考えると、この絵に描いたような梅雨の天気は、そんなに悪いモンじゃないような気がしてくる。世界が平和な証拠。うん、やっぱり普通が一番だ。

教室の外は昼間だったのに薄暗く、雨がしとしと降り続く。そんな景色をぼうつと見ているうちに、なんだか眠くなってきた。

（ああ　眠い。あれかな、春眠暁を覚え　）

とまで思つて、今が初夏だったことに気付く。心の中で自身にツツコミを入れたりしながらなんとか眠気を抑えようとするが、それはまあ俺の微力な精神力が強大な睡眠欲という怨敵に打ち勝てるはずもなく。

（　ま、いいかあ。　）

などと諦めるのもストレートに、眠りに落ちて行つた。

2

ガタン。

突然、脳の一部が揺さ振られたような感覚で目を覚ました。ほら、墜ちる夢つてあるだろ？あんな感じでガクンつて。教室の中だったことを思い出し、俺は何やら恥ずかしいやら申し訳ないやらで、おずおずと周りを見渡す。

よかった、誰も気付いてないようだ。思ったより大きな音を出したわけではなかったらしい。クラスメイト達は俺を気にする素振りも見せず、音も立てずに机に向かっていてる。

・・・あれ？音も立てずに？

妙な違和感を感じて、教壇の教師を見た。いつもなら耳に入るだけで眠気を誘う淡々とした教師の声。それが一切聞こえない。教師は黒板に向かったまま、チヨークで何かを書こうとしているが、そのチヨークは黒板に当たる音さえも発てずに停止している。

おいおい。何かの冗談か？

俺は後ろに振り向き、友人である男子生徒を確認する。そいつは確かに机に向かっていた。だが、シャープペンシルでノートに何かを書く途中で固まったまま、ピクリとも動かない。

「おい！杉山っ！？」

呼び掛けてみるが、反応は無し。ドッキリか何かと思い、よくよく教室中を見渡してみたが、杉山と同じく誰一人として動いている気配が無い。

俺一人だけを除いて。

「・・・マジか・・・？」

普通じゃない。どう考えてもこの状況は異常だ。時間が止まったようなこの空間で、とりあえず俺なりに色々な考えを張り巡らせるが、そもそもが極凡人の俺だ。大したことが浮かぶはずもない。時間が止まっているのならなんでも好き放題できるな・・・とか、なんで今がテスト中じゃなかったんだろう、なんて俗な考えが思考を埋め尽くしかけた時、はっと我に返ってもう一度頭を過つたのが、いつまでこのままなんだろう、などとやはり普通の考えでしかなかったところが自分でも悲しい。

いや、悲しくなんかないぞ。普通であることが何より。俺はそれを誇りにこそ思えど、悲観する必要なんてない。

そう思うと落ち着いてきた。そうだ、普通な俺は俺なりに、この状況を整理してみよう。

まず世間一般にこういう場合、王道のパターンが決まっている。そう、『夢』だ。うん、極平凡な俺にはそういうパターンが実にしっくりくる。よくよく考えれば、こんなの夢に決まっている。思い出せば、授業中にうとうとしていた俺が、そのまま爆睡していると考えるほうが無難じゃないか。ははは、何を焦っていたんだろう、俺は。

それならば簡単な話だ。ここで机に頭でもぶつければ一気に目が覚めて俺はいつもの教室の中つてわけさ。そうと決まれば・・・って待てよ。更に王道を考えれば、頭を打った瞬間に、うとうとしていた俺は机に頭をぶつけて目を覚ます。となれば、大きな音を立ててしまつて、さつき危惧していた状況に追いやられる、つまりみんなに笑われるか、教師に注意されるか、どちらかの運命が待っているわけか。

・・・。

・・・。。

・・・うん。なんて平々凡々な結末だろう。いや、もうここまでセオリー通りなら、それはすでに芸術の位置に達してしまっている。我ながらホレボレするほどの平凡さだ。

俺は一度深呼吸して、再度机に腰を掛ける。そうして深く息を吸い、狙いを定めた。狙うは、机上平面のど真ん中。額を思いつきり・・・打ちつけたっ！

3

・・・。

・・・。。

・・・。。

・・・痛え。

空気はしんと静まり返っている。しとしとと降り続いていた雨はもう止んでいるのか、窓の外からは何の音もしない。机に突っ伏した状態で居た俺は、顔を上げるのを少し躊躇った。クラスメイトに笑われるのは覚悟していたが、それでもやはり目立つのがイヤな俺としては若干の勇気が必要とする。

深く息を吸って、覚悟を決める。おずおずと、ゆっくり頭を上げた。

・ ・ ・ ・ ・ 。
・ ・ ・ ・ ・ 。
・ ・ ・ ・ ・ おい。

笑えない。笑われるのは覚悟していたが、はつきり言っただけで笑えない。

そこは相変わらず、時間の止まったままの、不思議な教室だった。

4

・ ・ ・ マジか。こんな状況で、超の付くほどの一般ピープルな俺にどーしろと言うのか。いや、それ以前にこんなことがあっていいのか。百歩譲って、まだ一般常識が通じるようなトラブルなら認める。どこぞの時代遅れな柄のよろしくない連中に絡まれたとか、家が火事になったとか、そんなことが望むべくして起こるなんてのはもちろん御免だが、とにかくこの状況はそんな範囲を遥かに越えて一気にやってきたわけだ。考える。有り得てしまったからには受け入れないとならない。普通な俺は普通なりに、この状況をどうにかしなければならぬ。

・ ・ ・ 。

・ ・ ・ ・ ・ 。

・ ・ ・ ・ ・ アリエナイ。

ダメだ、いくら考えてもその言葉しか浮かんでこない。俺はさすがに自分自身の普通さにがっくりとうなだれてしまう。
と、その時。

「ぶつ。」

誰かの声が聞こえた。それも吹き出すような、何かを堪えるような。

ふつと口をついて出た言葉は、不機嫌以外の何物でもなかった。

「ぶっ……くっ……ちょ、ちょいまって！お、お腹が……よ、よじれ……くくっ……は、ひい……。」

一体何がそんなにツボに入っただか、少女は呼吸困難一歩手前くらいの勢いで尚も笑いを止めようと必死であがいている。

「……。」

一瞬ム力つとした俺ではあったが、余りにも盛大に笑い続けやがるので、ム力つきを通り越して逆に呆れていた。

「ひ、ひい……ふ、ふあっ……。」

ようやく落ち着きを取り戻してきたのだろう。少女は深呼吸を始めると、呼吸を整えだした。

「……ふう……はぁ……。」

「……。」

「……こほん。……で、なんだっけ？」

「……そりゃこっちの台詞だっ……！！！」

「だってー！さっきから見てたらあんた、なんかぶつぶつ笑いながら呟いてると思ったたらいきなり机に頭ぶついたりまたボソボソ言いだしたり、かと思ったらいきなり落ち込んだり……なんかすんごい面白かったんだもんっ！」

・・・見てやがったのか。

「んなこと言っただってこんな状況でまともな行動できる奴がいるかっ！」

「だから説明しよーとしたんじゃんかー！そしたらあんたいきな・・・つぶ、お、思い出したらま、また笑いが・・・っ。」

「説明すんならさっさと声掛けやがれよっ！！・・・って、え？お前・・・。」

そこで気付く。相変わらず俺とそいつ以外のクラスの奴らは止まっただけ。つまり、動いているのは俺とこのガキだけ・・・？

「だ、から、声掛けようとしたのっ！そしたらあんたが勝手に自分の世界に入っちゃったんじゃない・・・あー苦しかったあ・・・。」

「ちよつと待て。ってことはお前、今の状況がどういう状況だか理解してんのか？」

「え？あ、うん。だってあたしがあんたを連れてきたんだもん。」

「・・・は？」

今、あっけらかんとんでもないことを口にしなかったか？

「だーかーらー！あんたをこの『ディレイ・ワイフ亜空間』に連れてきたのはあたしなんだってば！」

・・・うん、確かに言い切ったな。

「あー・・・ちよい待て。今頭ン中を整理する。」

つまりあれだ。この極凡人たる俺の精神状態を錯乱させた元凶はつまりこの少女だと。更に付け加えるとそんな俺を見ながら腹がよじれるくらい大爆笑しやがっていたのもこいつだ。

二つのことを繋ぎ合わせると、俺をからかうためにこんな手の込んだ超常現象を用意したってことになる。・・・わざわざ？何のため
に？

自慢じゃないが俺には取り柄がない。そりゃもう可もなく不可もなく。当たり障りもなく、居ても居なくても分からないくらいに平凡な人生を送ってきた俺だ。余りの存在感の薄さに、いつぞやの修学旅行では集合時間に遅れ、バスに乗れなくて置き去りにされたくらいだ。その時はなんとか途中で気付いてもらい、タクシーで追い付くことができたんだけど。

・・・まあとにかく、それくらいに超越した凡人な俺を陥れる理由とはなんなのだろうか？

「・・・で、何が目的だ？あいにく俺にはこんな妙なところに拉致されるようなことなんて身に覚えがないんだが。」

少女は何故だか一瞬目を丸くして、少し考えた後、にこやかに答えた。

「簡単に言つとね、あんたを殺しにきたの。」

「ほほー・・・。」

あー、なるほど。そういうことなら理解出来る。まあこの状況にお

いて考えられることってのは対して幅も無いんだが。

「・・・で、何の為に？」

極々冷静にそう返すと、少女は少しつまらなさそうな顔をした。

「あれ？妙に冷静じゃん。なんで？」

「なんで？ たつて、それが今の状況から推測するに、最も『普通』だからだ。それとも何か？ お前は俺をからかうためだけに、こんな手の込んだ超常現象を用意したつてのか？」

少女はまたもや丸い眼を更に丸くすると、口を開いた。

「へへ、驚いた。最初はどんなバカかと思ったけど、単なる馬鹿じゃないのね、あんた。」

「・・・そりゃ、どうも。」

あんまり馬鹿だ馬鹿だと言われるのは癪に触ったが、ここで喚いても仕方ない。どうやら、この異質な状況に於いて、この少女が鍵を握っていることに間違いはない。ここは合わせてやるべきだろう。

「で？ 質問の答えがまだだ。お前は俺を殺しに来たと言ったが、それは何故だ？ 理由も無しに殺されたんじゃないや俺も浮かばれんぞ。」

少女は少しだけ考えると、俺のことをジロジロと眺めだした。

「な、なんだ？」

「・・・うん、そうね・・・見てくれは平凡だけど・・・うん、まあいいや。決めた！」

・・・？なんだ？何を決めたって？

「あんた、あたしと契約しなさい。」

へ？

契約？なんだよそれ？

俺は少女の言っている意味が、全くもって理解できず、惚ける。

「簡単なことよ。今から言う言葉を、あんたの口から復唱するだけ。ね？簡単でしょ？」

いや、簡単だとか難しいとか

「そういうことじゃなくて！ちゃんと説明しろよ！意味がわかんねえっ！！」

少女は、きょとんとして、何やらまた考えだす。

いや、だか

らきょとんとしたいの俺のほうなんだっつーの。

「あ、そっか。あんたは何の『記憶』も持ってなかったんだっただ・・・そっかそっか、あははは・・・あー危ない、またアトウラに馬鹿にされるとこだったわ・・・。」

・・・何やらよく分かんが、説明する気にはなったようだ。

「えーと・・・じゃあ何から説明しようか？・・・うん、まずはあたしのこと。・・・そうね、あたしはあんたたちの言う　神様　つてところになるのかな？」

神様あ！？・・・こいつが？・・・いや、別に俺が本物の神様を見たことがあるってわけじゃないが・・・にしたってこいつを神様と呼ぶには、いくらなんでも・・・。

「けど、あたしたちを神様なんて呼ぶのはあんたたち人間だけ。あたしたちは、『裁定者』って呼んでる。あくまで、人間の言葉を借りて言うただけだね。」

「『裁定者』・・・裁きを定める者？・・・一体、何の？」

「・・・大昔、それはそれは遙か昔に・・・永遠の命と、大いなる力を持った生命体があったの。それが、『旧きものども』。彼らは、永遠に等しい時間の中で、同じくらいに無に等しい自分達『旧きものども』を哀れんだ。どれだけ永い時間を生きられようが、どれだけ果てしない力を持つていようが、所詮、永遠なんて『無』に等しいことに気付いたのね。」

・・・当然だ。有り余る力を持つていようが、永遠の命を持つていようが、役に立たなければ宝の持ち腐れ。しかも死ねない分だけ性質が悪い。

「でもそれに気付いた時には遅かった。『旧きものども』は、すでに永い時を生き過ぎたの。そこにあったのは、限らない『混沌』でしかなかった。」

つまり力は暴発を重ね、死ねない故に増殖して、後戻り出来ないと

こまで行っちゃまったわけだ。

「そんな中、一柱だけ、なんとか理性を保っている生命体がいた。それが『クウルトウル』。この世界を造った、創造主よ。彼は、自らが力に吞まれ、溺れてゆくことを忌み嫌った。だから、自分の理性が消え去る前に、この世界　地球を創造し、自らの魂とその肉体を分けて、『生命』を産み出したの。」

「・・・とんでもないスケールの話だな。世界を造った神様がいて、その神様自身が分かれたのが生命　つまりは俺たちだったのか？」

少女はこくりと頷き、更に続ける。

「『クウルトウル』が産み出したのは、まず最初に魂の分身。『始まりの子』ら二十八体。そして、その後に自らの肉体を七つに裂き、魂を導く為の役割を持たせたあたしたち『裁定者』を造り上げたのよ。」

スケールのでかすぎる話だが、ここまではなんとか理解出来た。キリスト教や他の宗教なんかでも似たような話があったからだ。

「　ちよつと待て。そこまでは理解出来たが　肝心の、俺が殺される理由が全く解らん。あと・・・なんだ？その、魂を導くつてのはどういうことだ？」

すると少女はクスリと笑って、続けた。

「　言ったでしょ？簡単に言うて、って。この話には続きがあるの。　無から生命を産み出した『クウルトウル』を、他の『

旧きものども』は気に入らなかったの。自分達以外の生命体を認められなかったんだと思う。すでに彼らは理性の欠片も無い、傲慢で貪欲な、醜い獣に成り下がっていたから。」

「・・・俺にはよく解らんが、あれか？悟りを開くって意味が、要らない感情や感覚を捨てるってことだとしたら、その極論ってことか。つまり、永い年月を生きる為に、要らない感覚や感情を少しずつ削り取って、残ったのが『己の保存』だけになっちまったと。」

少女はまた目を丸く見開いた。

「・・・あんた、頭いいわね。・・・そう、その通りよ。・・・己への執着だけが残ってしまった彼らにとつて、この世界はまさに異分子だった。だから滅ぼそうとしたのよ。遥か昔、『ルルイエ』という『旧き神』を使つてね。『旧きものども』は、兵器たる『ルルイエ』をこの世界に落として、『クウルトウル』の分身である全ての生命　あたしたちを含めて、全てを飲み込もうとした。・・・ま、なんとか食い止められたから今のこの世界があるんだだけどね。それでも大きな犠牲を払ったわ。ほとんどの『始まりの子』の魂や・・・『裁定者』の半数が、『ルルイエ』を封じる為に犠牲になった。」

「滅　っ！？　　け、けどちよつと待て！『旧きものども』つてのはあれだろ？とんでもない力を持つてたんだろ？なのになんでそんなまどろっこしいやり方を？やるなら自分でやりやいいのに。」

「・・・出来ない理由があつた。それは『旧き盟約』。彼らは、互いに干渉しあうことを恐れた。『己への執着』の為に、盟約が必要だったの。」

・・・なるほど。そう言われれば解る。同じように大きな力を持つた者同士が激突すれば、消滅、融合、反発・・・どちらにしろ、何が起こるか解らない。互いの保存の為に用意したルールってわけだ。

「そして、現在。『旧きものども』が動き出したのよ。再び、『大いなる災い』を引き連れてね。」

「　　っ！・・・なんだって？ってことは・・・その、『ルルイエ』の時みたいにな・・・世界が滅ぶかもしれないってことがっ！？」

「そうさせない為に、あたしたち『裁定者』は、『始まりの子』を集めてるの。この世界で、彼らの陰謀を防ぐにはあたしたちと『始まりの子』の力を使うしかないから。」

・・・なんとなく、流れが読めてきた。つまり、こいつが探してるのが『始まりの子』で、俺の前に姿を現したってことは。

「　　俺が・・・その、『始まりの子』だと・・・？」

「その通りよ。手間が省けるわね。あんた、実は頭の回転恐ろしく早いでしょ？」

まてまてまてっ！！

「ちょーっと待て！？いや、俺はこの通り凡人中の凡人、キングオブ凡人だっ！俺にそんな凄い力があるわけないだろ！？」

「『始まりの子』の魂はね、オリジナルの魂なの。オリジナルの魂

はコピーと違って、消滅することはない。それどころか、コピーの魂を使って集めた『記憶』や、オリジナルの魂が宿った肉体の『記憶』を全て保存して、貯蔵する。最も、肉体が死ねば次の肉体に自動的に移って、表向きの記憶はリセットされるから、どの『魂』であつても普通は変わらないんだね。『クウルトウル』がそう造つたから。・・・つまり、肉体の力はほとんど関係ない。肝心なのは『魂』の力。即ち、『保存』している『記憶』の力ね。人間が独自で造った『魔術』なんかに關しても同じような理論を使つてゐるわ。最も、その場合は補助的な役割として『呪文』であつたり『紋様』であつたり、外的な『記憶』を引用してゐるけど。」

「つ、つまり・・・俺が何であれ、俺の魂にはそれだけの『力』が宿つてゐるということか・・・？」

「そゆこと。・・・まあ・・・無理強いはいしないわ。ほんとには首に縄付けてでも連れて行きたいとこだけど・・・アトゥラに強く止められてゐるから。でも。もしあんたが断つたら、どうなると思ふ？」

・・・『ルルイエ』の時は、『始まりの子』のほとんどと、『裁定者』の半分が犠牲になつたつて言つてたな？つてことは、今残つてゐるのは俺と・・・あとどれくらい残つてゐるかは知らないが、『ルルイエ』の時ほど戦力が居ないのは間違いない。それと『裁定者』が、この少女を含めて、三人か四人。・・・つまり状況的には圧倒的不利つてことか。俺が断れば、その状況は更に悪いほうへ傾く。・・・それは即ち、この世界の滅びを指すつてことだ。・・・くそっ！どちらにしても俺にとっては悪い状況には違いないつてことかよ！

「・・・お前、俺を殺しにきたつて言つたな？俺が断れば・・・どうするつもりだ？」

少女はニコリと微笑む。

「別にどうもしないわ。でもあんたが断れば、この世界は確実に滅ぶわね。・・・要するに、死ぬのは同じよ。みんなで一緒にね。」

・・・なるほど。逆に受け入れれば、俺はこれまでの生活を捨てなきゃならない。それはある意味、今までの俺が死んだのと同じだ。・・・悪くすれば、本当に死ぬようなこともあるかもしれない。その時点で、世界も滅ぶ。　　つまり俺には　　。

「　　くそっ！選択は始めから一つってことかよっ！！」

俺が下唇を噛むと、少女は満面の笑みで微笑んだ。

「　　やっぱあんた、頭の回転、早いわ。　　安心して。あんたは誰にも殺させない。あたしと契約してくれるなら、あたしはあんたを護る。それがあたしの『力』だから　　。」

もうどうとでもしてくれ。俺は、半ば投げ遣りに少女に問う。

「　　で？どうすりゃいい！？」

「簡単よ。　　あたしの名は『イアクグア』。さあ、あたしの名を呼んで。あんたの名は　　？」

『イアクグア』の身体が、エメラルドの光を放った瞬間、理解した。契約というのがどういうことか。　　俺は、少女に向かって『命令』する。

「俺の名は、『向井明』っ！！我が名に於いて
『イアクグア』よ！力となれッッ！！！」

エメラルドの光は一度広がり、段々と収縮して一本の棒になる。棒はゆっくりと姿を変え。

「っ！こ、これは？」

『我こそが主人の刃。我こそが主人の楯。我は、『イアクグア』。帝を守護する者なり。』

まばゆい光に包まれて、手に残ったのは、エメラルドに輝く、三つ又の槍だった。

「っ！・・・イアクグア・・・お前か・・・？」

『・・・ま、仕方ないよね。ほんとは不本意だけど、力を貸したげるわ。感謝なさい？』

・・・よく言う。始めっからそのつもりだったくせに。

『ほらっ！さっそく来たわよっ！気合い入れてっ！？』

へ？

「・・・来たって、何が？」

『・・・あれ？言ってなかったっけ？最初にあたしたちがすることは。』

と、説明を受けるより先に、奴はやってきた。ドゴンと地鳴りを上げて、校舎の外に見えたのは。

「 なっ なんだありやあつ！！??」

そこに居たのは、見たこともない化け物だった。

『 断片の欠片』よっ！！すぐ外に出て！！『亜空間』とは言ってもダメージは残るわ。早くしないと、この教室ごと吹き飛ばされるわよっ！?』

「 なっ つ!？」

なんだとおっ！！??

と、言うよりも早く俺は教室を飛び出していた。

マズい、非常にマズいっつ！！！！あんなのがここで暴れ回ったら

それこそ、笑い事じゃ済まされない。

俺は必死で走って、校舎を後にする。走りながら。

「 つと、とにかく説明しろっ！簡潔にっ！可及的速やかにっ
っ！！！！」

『あゝ・・・つと、えとね？あたしたちが最初にしなきゃいけないのは、ある『魔本』の断片探し。その魔本ってのがまた厄介な代物で。』

ズガーーーーーッッッ！！！！

ぐあっつっ!？ くそっ、攻撃してきやがったっつっつ！！！！
十メートルはあるんじゃないかと思られる化け物が、これまたとて

つもなく長い腕を振り回す。なんとかグラウンドまで出てこれたので校舎に直接的な被害は無かったが、力任せに振り回した腕は、地面にどでかい穴を開けた。

「　　っ！　　マジかよっ　　！？」

化け物は地面に腕を突き立てて、態勢を建て直そうとしているのか、ゆっくりと腕を引き戻してゆく。　　だが動き自体は愚鈍だ。避けられないほどじゃない！

「　　っちいつ！　　イアクっ！説明の続きだッッ！！」

『　　っ！あいつはカルキ！『クルトウース断章』の三番目のページ！存在自体は物凄く不安定だから、核を壊せば簡単に倒せるわ！核は　　っ！』

その瞬間、目の眩むような光が辺りを包み込む

「　　つくうつ！？メガトンパンチの次は破壊光線かよっ！？ハイダー（古）かあの野郎っ！」

カルキの口から発せられた非常識な光線をなんとか躲すと、俺は槍を持つ手に力を込めた。

「　　核はどこだっ！？」

『　　額よっ！あの水晶体を壊せば断片に戻るわっ！！』

額　　ってことは、ヤツの懷に飛び込めってことか？　　いく
らノロマだからってそうやすやすとは潜らせてくれそうもないが・

・ん？待てよ。・・・そうだ、その手があったか！

「・・・額だな？わかった。」

『どうするつもりっ！？離れればビームが、近寄ればあのとんでもないパンチが襲ってくるわよ！？どうやって。』

俺はイアクの言葉が終わるのを待たずに、カルキに向かって一直線に走りだした！

「こうすんだよっ！！」

『ちよっ！あんた、なにするつもりよっ！？』

一直線に向かってくる俺に対して、カルキは例の破壊光線を放とうと一瞬硬直する！俺はその瞬間、左に飛んで光線を反らした！

『っ！まさか　　っ！』

「ガラ空きなんだよっ！！」

俺は槍　『イアクグア』を大きく振りかぶると

『ちよっ、やめっ　　っ！』

投げた。

「飛んでけええツツツ！！！！！」

『きゃあああ~~~~ツツツ！！！！？？？？』

。。。。。

。

俺の投げた『イアクグア』は、光線を放った直後に動きを止めたカルキの脳天を、文字通り、貫いた。

額の水晶体ごと頭を貫かれたカルキは、断末魔の叫びをあげながら光の粒になって、下から消えてゆく。カルキの真下にいた俺は、上から落ちてきたイアクを受け止める。

「　　っふう。なんとかなるもんだ。」

俺はその場に座り込むと、とりあえず息を大きく吸い込んで、吐いた。足には結構キていたが、動けないほどじゃない。相手が単純馬鹿で助かった。こりやちよつと身体を鍛え直さないと保たないな。

『　　なんとかなるもんだ、じゃないわよっ！！なんて無茶すんのあんたっ！？』

「・・・いや、あの状況じゃ、誰でも思いつくと思うぞ？幸い、あいつ動きはトロかったし。」

何やらイアクはご立腹のご様子だ。

『そーゆー問題じゃないっ！！大体、普通投げないわよっ！？もし水晶体を外れたらどうするつもりだったのよ！？』

あー・・・そこまでは考えてなかった。確かに、もし急所を外れていたら手元に武器は無し、更にはあのメガトンパンチの反撃を食ら

ってオダブツだっただろう。

「ま、上手くいったんだし、終わり良ければ総て善しってことで。」

「！・・・信じらんない・・・あんだ、やつぱただの馬鹿よっ！バカバカバカ大バカっ！！」

「なにおうつ！？」

「バーーッカ！！」

「馬鹿馬鹿言いすぎだっ！大体、お前がちゃんと説明してりやこんなことにならなかったんだろがっ！！」

「後先考えない大馬鹿者に言われたくないわっ！大体あなたの何が普通なのよっ！？まともな神経の人間にできることじゃないもんっ！！」

「俺のどこが普通じゃないって！？しかも今まともじゃないとか抜かしやがったなっ！？一番非常識なお前だけにや言われたくねえっ！！」

・・・・・・。

売り言葉に買い言葉。結局、そのまま小一時間ほど、この妙竹林な

口喧嘩が続いた。

・・・と、まあこんな感じで俺の平和で平凡なこれまでの人生は幕を下ろし、この非常識なガキとの生活が始まったのである。

・・・ちなみに、無事家に帰れたのが、グラウンドに空いた穴を埋めたり着替えをして教室に戻って授業の続きを受けたりした後だったことは、言うまでもない。

続

く紫硫の門く

死について、抵抗があったわけでもない。もつと言えは死という概念が数多の世界においてどれほどの影響力を持つが、私にはどうでも良いことだったのだ。

死の概念　つまりは肉体の滅びであるとか、魂の存在であるとか。そんな些細なことが、本当につまらなく感じた。いや、感じていたというべきか。

死という存在が生と隣り合わせにあることは理解していた。良く言えば覚悟が決まっていた、悪く言えばそれはどこまでも愚鈍だったと言うことだ。

とにかく、私にとって生を全うするという意味が、死を待つということ以外の何物でもなかった。

1

いつものように校門を抜けた場所に彼はいた。

「.....」

「あ、唐木さん？ いやあ、き、奇遇だねえ。今、帰り？」

その彼は、ここ2、3日私の周りをウロウロとしていた。特に何をするといいわけでもなく、ウロウロとするだけ。話し掛けてきても私は基本的に無視を続けていたが。

彼はクラスでも目立つほうではない。取り立てて特筆すべき箇所のない、極々一般的な男子生徒だ。

「よかったら、一緒に帰ってもいいかな？ い、いやっ！ 後ろからつ

いてだけでいいから！」

「……。」

私は返事をせず、そのまま下校路を歩きだす。別に危害を加えるわけでもないのだから、好きにすればいい。私には関係の無い話だ。彼は、私の後ろからスタスタと付いてくる。別段、迷惑なわけでもなければ、元より私にとってみれば自分を含めた全ての事柄をどうでも良いと感じていたのだから。それよりもこの男子が私になどまといりつくことが不思議で仕方なかった。だが三日目。そろそろ飽きる頃だろう。

「あのだ、唐木さん。」

そう思った時、彼が突然に口を開いた。私は内心少しだけ驚き、足を止めた。彼は更に口を開く。

「え、えとさ……こんなこと言うと、おかしい奴って思われるかもだけど……唐木さん、神様の存在って信じる？」

……突然、私の足を止めさせるほどの不意打ちの発言は、そんな言葉だった。

「……。」

私は思わず呆氣にとられて、立ち尽くした。いきなり、何の話なのか。

「いやまあ　　うん、神様ってのは言い過ぎかな。えーと、どっちかってーとなんというか……うう……あの、気をつけて欲しい

いんだ！」

「・・・やはりよく、わからない。今度は気をつける？・・・もしかして彼は私をバカにしている？」

「・・・。」

私は振り向き、彼を見た。申し訳なさそうにあたふたとしている様子を見ると、馬鹿にしたという感じは見られない。じっと見ていると、もう一度彼が言った。

「あの　ほんと、いきなり変なことを・・・いや、こんなの全然普通じゃないんだけど・・・俺の言うこと、信じて欲しい！信じられないとは思っただけど、いや、俺だって未だに信じられないっつーか・・・と、とにかく今は言えないんだけど、信じて欲しいんだ！！」

そういう彼の目は、本気だ。

「・・・わかった。」

気が付くと、私は彼に口を開いていた。

「・・・へ？」

「・・・貴方の言うこと、信じる。気を付ければいいのね？」

「・・・あ、ああ！」

彼は驚いていた。いや、こんな言葉が出たことに、実は当の本人が

一番驚いていた。一体何に気をつければいいのかすら分からなかったが、彼が本気なのは十分に解った。私は、もう一度振り返って、歩き出した。彼は黙ってついてきた。結局その日は、彼は私の住むアパートの前までついてきたが、さすがに部屋までは来なかった。

「じゃ、じゃあ俺はこれで！また明日！」

彼はそういうと、一目散に駆けて行った。・・・声に気付いて、アパートの入り口で私が振り返った時には、もうその背中はずっと遠くなっていた。

・・・お茶くらい、飲んでいけばいいのに。などと私は一人で呟き、エレベーターに乗った。

2

部屋の鍵を開ける。

ガチャ、と音がして、私はノブを回した。

制服とブラウスを脱いで、洋服掛けに掛ける。そして下着のままベッドに横になって目を閉じる。

・・・彼の言っていた言葉。気をつけろと。・・・一体何に気をつけろと言うのか。そもそもの、神様を信じるかという質問。・・・私は答えていない。

神様・・・居るのかと問われれば、居ないことも無いのかもしれない。人がその存在を神様と呼ぶのであれば、多分それは存在するのだろう。ただし、その存在は、多くの人が望むような都合のいいものじゃないことだけは分かる。そんなものは、居はしない。

それを否定することもない。かと言って、肯定するにはその存在は余りにもあやふやだ。

つまり、私にとってはどうでも良い話。・・・そのはずだった。

しかし、彼の口からその質問を投げ掛けられた時、私の心は一瞬だ

が、ざわついた。

「神様を信じるか。」

神様とは何のことだろう。そして気をつけるとはどういうことなのか。

慣れないことが続いて、私の脳は疲労していたのか、そのまま、いつのまにか眠りに落ちていた。

3

ガタタタタ！

突然の物音で、私は目を覚ました。すぐに上着を纏い、カーテンを開けて窓の外を見る。・・・窓の外？この部屋は三階だ。しかもベランダは無い。なのに何故、私はこんな無駄なことをしているのだろう。

しかし、窓から見える裏路地を走ってゆく人影らしきものを発見した時、彼の言葉が脳裏を過った。

「気をつけて欲しいんだ！」

彼が言っていたのはこのことなのか？あの影のことを、彼は知っていたのか？

次の瞬間、私はスカートを身につけ、部屋を飛び出していた。

4

「はあっ・・・はあっ・・・」

あの影が向かっていたのは公園の方角だった。街の中では広い部類に入る場所だ。物音がしてから、私が起き上がり、窓の外を見るまでの時間はほんの十数秒。そんな短時間で、アパートの三階から飛び降りて逃げられる人間などいない。

人間でなければ、なんなのだろう。不意に、彼の「神様」という言葉が頭をちらついた。

・・・馬鹿馬鹿しい。人の部屋を窓から覗いたあげく、全速力で逃亡していくような神様など聞いたことがない。

「・・・はあ・・・はあ・・・っ・・・。」

気が付くと、私は大通りを抜けて公園の入り口まで走ってきていた。急いだせいで、呼吸が追い付かない。額から伝わる汗が、シャツを濡らして背中が気持ち悪い。

息を整えて、冷静さを取り戻すと、急に馬鹿らしくなってきた。一体、私は何をやってるんだろう。普段の自分なら、こんな出来事など、箸にも架けなかっただろう。それがこんなに息を切らして、得体の知れない何者かを必死で追い掛けているなど　正直、想像もできなかった。

私は、どうかしてしまっただんどうか。

公園の中央、噴水のある広場まで来たところで、噴水の脇に腰を掛けてしばらくぼんやりとしていた。よくよく考えれば、あれだけのスピードで走り回るモノだ。方向が分かったからといって追いつけるはずがない。ここまで考えて、やっと私は自分が冷静でなかったかを思い知った。

帰ろう。多分、あれは何かの見間違いに違いない。寝呆けていたのだろう、帰ってシャワーでも浴びてすっきりすれば忘れるに決まってる。そう考えて、立ち上がった瞬間だった。

5

『ギャウウウウツツッ！！！！』

獣が吠えるような・・・いやそんな生易しい、声と呼べるモノではなかった。生の大木を引き裂いたような、地鳴りがするほどの『音』

。それが、私のすぐ近くで辺りにけたたましく響き渡った。さすがに私は驚き、音のほうを振り返った。そこに在ったのは、そんなけたたましい『音』を遥かに凌ぐ、この世ならざる、『恐怖』だった。

『ぐるるるるるうう・・・』

体高は2メートルを超すだろうか。全身に皮膚らしきものではなく、筋肉のような紅い筋が露出しており、口らしき場所は大きく裂け、真つ赤な舌からは涎を垂らしている。眼は一つしかなく、瞳孔が開き切ったような突き抜ける血走った眼球が、飛び出るかと思うほどにこちらを射抜いている。

蛇に睨まれた蛙とはこのことだろうか。明らかに補食者であろう『ソレ』を目の当りにして、私は一步も動けずにいた。

ありえない、こんな生物・・・いや、存在自体が在り得ない。硬直したまま動けない私を嘲笑うかのように、その異様な化け物はズルツ、ズルツと音を発ててこちらに向かってくる。足なのかなんなのかよく解らなかったが、ヌルヌルしたような無数の蠢く触手で動く様は、一種、巨大な蛞蝓のようにも見えた。

ゆっくりと迫ってくる化け物。私は、もうダメだと思った。もともと覚悟はできていたはずだ。人はいつか死ぬ。死と直面して尚、それは揺るがなかった。しかし、化け物の触手が目の前に迫った時、思い出した。

『気をつけて欲しいんだ!』

彼の言葉が何を差していたのか。これでようやく解った。それを理解した時、初めて私は後悔した。

もしもあの時、彼の言葉をちゃんと理解できていればこんな死に方はしなくて済んだのに。その刹那、私には初めて、あの感情が湧いた。

生きたい。

しかしすでに遅い。こんな状態で、やっと私は理解したのだ。生と隣り合わせにあった、死という存在を。私は、恐怖した。自らの肉体が、こんな異様な化け物に噛み砕かれて、引きちぎられ、消滅させられることを。そして絶望した。自分の今までの人生を振り返り、自らの愚かさに。そして・・・それは、本当に突然起こった。

6

『ビギイイイイッッッ！！！！』

私が懺悔の言葉を浮べた瞬間。

化け物の悲痛な叫びにも似た『音』が響き渡る。

目を開けた私の視界に飛び込んできたのは 月の光を浴びて、エメラルドに輝く、何か。化け物に深々と突き刺さる、それは・・・三つ又の、槍だった。

『ビギッッ！！！！』

頭部に躊躇無い一撃を受けた化け物は、さすがに堪らなかったのか、先程までのゆっくりとした動きとは打って代わり、目で追うのがやっとなほどの機敏な動きで跳躍した。辺りには、どす黒い、恐らくはあの化け物の体液であろう液体が飛散している。

私はと言えば、何が起こったのかすら解らず、さっきまでの絶望感と、緊張の糸が弛んだ脱力感とで、その場にしゃがみこんでしまっていた。

「だいじょうぶか！？唐木さん！」

・・・事態が、全く把握できないまま惚けていた私は、そのエメラルド色に透き通る三つ又の槍をかざした人物が一体誰なのかを確認することにさえ、かなりの時間を要したように思う。それは、私の知っている人物　　彼だった。

7

彼は、私に手を差し伸べていた。私は、その時ほど誰かに救いを求めるということに、安心感や安堵感を持ったことはなかっただろう。彼の掌は、とても優しく、そしてどこまでも心強かった。

「怪我は無い！？・・・ったく、よかったよ、いつも通り張り込んで！まさかこんなに早く接触するとは思ってなかったけど・・・。」

彼の手を掴みながら、私は鼓動を抑えようとしていた。色々な感情が堰を切ったように湧いてきて、私は・・・。

「・・・にしたって、イアクー！あんなのが出てくんなら先にそう言えよ！！」

『えー！あたしはちゃんと言ったよ！？あんたの理解能力が鈍臭いんじゃないの？』

「なっ！！このガキ、俺のせいだってんのかっ！？」

『あーやだやだ、これだから万年影薄男はやーねー。そんなんだからいつまでも主役になれないのよ。』

「なんだとっ！？今平凡を馬鹿にしやがったなっ！？普通の何が悪い！大体な、おまえさえないけりや俺だってまともな日常を平和に、かつ有意義に送ってたんだよっ！それを」

『あんな箸にも掛からないような毎日の何が有意義なのよっ！ハンツ、ちゃんちゃら笑わせてくれるわねっ！』

「おまつ！？・・・いーい度胸だ、この際だからしつかりと身の程を教えてやる！！ついでに真の平凡とは何かを」

・・・泣いていたような気がしたのだが、彼が何やら誰かと言い問答をし始めたため、私は結局、彼の様子に茫然とするだけだったのである。

8

しばらく、事態が飲み込めなかった。それは別に彼のせいというわけではない。

「平凡男をナメんなああッッッ！！！」

『きゃー！ー！？ちよっ、やめてよそんなうわっ！？ああああそれだけは！ッッ！？』

・・・撤回する。

完全においてけぼりを食らっているのはどうやら私だけのようだ。彼は私のことを忘れて、手に持った、喋る槍と漫才のようなやりとりをずっと繰り返している。・・・何故か少し、ムカつとした。

「・・・あの・・・『むかいあき向井明』くん？」

私はこの時初めて、彼を名前で呼んだ。

「はがが・・・おいこらやめっ・・・ん？」

・・・やっと思いついたようだ。彼は私を見ると、バツの悪そうな顔をして、引っ張り上げてくれる。

「っしょつと。あはは・・・ごめん、怪我はない？」

「・・・大丈夫。それより・・・さっきのは、何？」

私が質問を投げ掛けると、彼　向井くんは、頭をぼりぼりと掻きながら、何やら困ったような顔をした。

「あっはは・・・うゝん、何から説明したもんかなあ・・・。」

彼は、槍をかざすと、何やら呪文めいた言葉を発する。すると、槍は瞬く間にその姿を変える。

「・・・。」

「えつと、こいつの名前はイアクグア。あー、こんなナリでも一応、神様らしい。ほらイアク！挨拶しろ！」

槍は、そのエメラルド色そのままの髪を持った少女に変身した。・・・変身？

私はわけが解らず、ただ一言、ぽつんと呟くしかなかった。

「・・・幼女誘拐？」

「　　っ!？」

彼はガーンと、それはもう漫画のような顔をして惚ける。その様子を見て、イアクと呼ばれた少女はキラーンと鋭い笑みを一瞬放つと、突然泣き（真似）ながら私に抱きついてくる。

「そーなんです！このお兄ちゃん、あたしに　なことや
ことを強要するばかりかあげくには　　なんてもう
。」

「　　んなあっ!?!」

してやったとばかりに私の胸の中でニヤリとほくそ笑むイアク。どうでもいいけど、私にも見えてる、それ。

「・・・そう。大変・・・だったね。じゃあ警察、行こっか。」

「ぬあっ!？待て、唐木さん!!騙されるな!!」

・・・さすがにこんなお約束のネタに騙されるほど、私も世間知らずではない。だが、二人のやりとりが面白いのと、先程のお返しとばかりに、しばらく向井くんをからかって遊んでいた。

9

その後、私は向井くんとイアクを連れてアパートに戻った。
冷蔵庫に残っていたプリンをイアクにあげると、彼女は一生ついていきますと私に服従を誓った。・・・うん、それもいいかもしれな

い。

そして、私は二人に詳しい話を聞いた。私が狙われていること。二人は、あるものを探しているということ。それは本の断片で、その本はとても大切なものであるということ。あと、イアクは私たちの言う、神様のようなものだということ。でもそれは都合のよいものではなく、人間という種よりも少しだけ特異な能力を持っているだけなのだということ。・・・一番驚いたのは、彼女は这个世界が生まれた時から生きているということだったけど。

そして、私が狙われる理由は、私が向井くんと同じように、イアクのような・・・『裁定者』と波長が合う人間だということ。それをイアクは『始まりの子』だと言っていたけど・・・詳しい部分は割愛する。

とにかく、私が気をつけなければいけない理由は以上の通りだったわけだ。あの時に詳しいことが説明できなかったのは、実は確証が無かったから。イアクに分かるのは、なんとなくのイメージだけ。それを確認するには、色んな方法があったけれど、向井くんは毎晩私のアパートの近くで張り込みをしていたらしい。それは、出来れば普通の毎日を送れるようにとの向井くんの優しさだったわけだ。例の化け物は、断片の一部らしい。本の断片とはいえ、本自体は魔術的にとてつもない力を秘めているらしく、断片ひとつであんな化け物なんて比べものにもならないほどの魔物を具現化する。断片はそれ自体が意志を持ち、本の支配下から独立しているため、本に戻されることを拒否するわけだ。

断片を本に戻すことが出来るのは『始まりの子』だけ。故に、私が狙われたということらしい。

・・・なるほど、それなら納得できる。向井くんのように『裁定者』との契約も持たず、何の力も持たない私は、彼らにとって恰好の標的だっただろう。

「・・・と、いうことで俺は唐木さんに接触したわけなんだ。・・・その、何も言わずにごめん。」

二人の証言からすると、遅かれ早かれ私は襲われていたはずだ。寧ろ、彼らのおかげで私は助かった。感謝こそすれ、謝られることなどない。

「・・・謝るのは私のほう。・・・ごめん。それと、ありがとう。」

「えっ、いや、唐木さんが謝る必要なんてないだろう？危険を知っていたのにちゃんと伝えることが出来なかった・・・俺の責任だよ。」

「・・・向井くんは私に気をつけるって言った。私は信じるって言った。なのに、不用意に自分から危険に飛び込んだ。自業自得。私は寧ろ向井くんに感謝してる。助けてくれて、ありがとう。」

他人とのコミュニケーションには慣れていない。だから、今の気持ちをそのまま言うことしか出来ないけれど・・・それでなんとか向井くんには伝わったみたいだ。

「・・・ま、そういうことなら。でもどうしよう？結局、根本的な解決にはなっていないんだよな・・・。多分、あんなのがまた襲ってくると思うんだ。四六時中俺が唐木さんに付きつきりってわけにもいかないし・・・。」

そうか、結局今も私には何の力も無い。もしも私が一人の時にまたあんなのが襲ってきたら・・・考えたくもない。

「はいはい！それならいい考えがあるよー！」

突然の提案を発表したのは、イアクだった。

「・・・なんだ？どーせ口くでもないことだとは思うが・・・一応言ってみろ。」

「いちいち言い方がムカつくわねあんた・・・まあいいや・・・明がここに住んじゃえばいいのよ！そうすれば万事解決っ！」

次の瞬間、彼の拳骨がイアクの後頭部を直撃していた。

「あいつたあゝゝゝっつ！！！！何すんのよっ！？」

「馬鹿かおまいはっ！！んなわけに行くかつ！大体、唐木さんは女の子だぞっ！？」

・・・なるほど。幸い、私は一人暮らし。向井くんさえ大丈夫ならそれで問題は無い。部屋も二つほど余ってるし。

「だってそれが一番手っ取り早いじゃないのよっ！どーせあんたの家は一人暮らしみたいなもんなんだし。塔子ん家だって似たようなもんでしょ？」

「そういう問題じゃねえっ！！だ、大体がだな、唐木さんがそんなのいいわけねえだろがっ！！」

「・・・いいよ。」

「ほれみろっ！！大体お前は一般常識的に・・・って・・・え？」

「向井くん達は断片を集めてる。そして断片は私を狙ってる。相互

関係の一致。多分それが一番良い方法。」

「ほら見なさいよー！塔子だって言ってるじゃん！じゃあ決定ね？」

「いや、ちょ、ちょいまってっ！？なんというかそれは色々とすごくマズインじゃないかと思うんですけど・・・っ。」

「・・・向井くんは、イヤ？」

「えあ、い、いや、イヤってわけじゃないんだけど、その、あの、えーと・・・っ。」

「何ぐたぐだしてんのよこの優柔不断男っ！塔子が良いって言っただからいいじゃないっ！！それより、このプリンってもうないの？」

「・・・お前、最初っからそれだけが目当てだな・・・？」

「（ぎくっ）な、何のことかしらっ」

「・・・何はともあれ、こんな感じで三人（？）の同居が始まったわけである。」

続

く夏休みのある日く

俺は向井明。とにかく平凡・平和・順風満帆をこよなく愛する17歳。取り立てて目立つところもなく、成績も中の中。クラスに一人は居る「極々普通」な、一介の男子高校生。・・・のはずだった。それが何故こんなことになっているのか。ほんの数か月前まで、教室の目立たない窓際の席で、梅雨の雨をぼんやり数えたり、そりやあもう平和に過ごしていたのである。

1

「あ~~~~き~~~~らああ!!!!」

・・・この真夏の糞暑い日差しを更に暑苦しくするようなガキんちよは、イアクグア。このお子様にしか見えない外見で、なんと俺たちより遥かに長く生きていると言うのだから驚きだ。

「ちよつと~~~~っ!!あんだ、あたしのアイス食べたでしょっ!?も〜信じらんないっ!!」

外見と同様、中身までお子さま丸出しときたまんだ。これでよくもまあ神様だなんて名乗れたな。

「ちよつと明っ!?聞いてんのっ!?」

「うつせーなあ・・・お前じゃあるまいし、んなもん食ったっての。」

「じゃああたしのアイスはどこ行っ たってのよ!?後で食べようと

思つて冷凍庫にちゃんと入れといたのにいゝゝゝっ!!」

ぐえっ!首を絞めて振るなっ!!

「くおのっ!出せっ!あたしのアイスっ!!」

「うがつ!?だっ!がつ!らっ!じらねえっで!!」

「あんた以外にそんなこと誰がするつてのよゝゝゝっ!!」

んなこと知るかと言おうとした時、呟くような声。

「・・・ごめん。私、食べた。」

イアクの動きが止まった。ソファアの上で静かに読書をしていた唐木さんは、衝撃の事実をイアクに突き付けたのであった。

「トーーーー~~~~・・・。」

イアクは恨めしそうな目をしたかと思つたが、ぐつと堪えた。お、少しは成長したか?

「・・・おいしかった?」

溢れださんばかりの涙で目を潤ませ、聞いた。

「・・・うん、絶妙。」

しかしその攻撃は自分にとってトドメの一撃として跳ね返ってくる

ことを覚えたほうがいいぞ。イアクは、無言で身体を震わせ、溜めた涙を放出している。・・・無残だ。いや、学習しろよお前も・・・。

「・・・・・・・・。」

うあ、ちよい待て、こっちか！？イアクは無言で涙垂れ流し状態のまま、今度は俺のほうに何かを訴えかけている。

「・・・・・・・・。」

「俺を見るな俺をつ！」

「・・・・・・・・。」

「・・・・・・・・。」

よっぽど口惜しいのだろう。この攻撃は止む気配が無い。・・・まったく・・・唐木さんがフロア入れるとも思えないし・・・。

「・・・・・・・・。」

「~~~~っああもうつ！わかったよ買えばいいんだろ買えば！！」

「ほんとっ！？じゃあね、ついでにプリンと・・・・・・・・。」

嘘泣きかよ。いや、まあそりゃ判ってたが。

「なんで増えてんだ。」

とりあえずスリッパで殴つといた。

2

「明〜！早く早く〜！」

結局、イアクの策略にまんまと乗せられた俺は、唐木さんが略奪したアイスを買わされる羽目になった。イアクは玄関の前で相変わらず喚いている。

「唐木さんは？行かない？」

「・・・ん。留守番してる。」

「あ、そう・・・。」

こちらもまた相変わらずソファーに座つて、何やら読書をしている。・・・何々？・・・『戦乱時における休暇の過ごし方』？・・・なんのこつちゃ。

「・・・あの、唐木さん？それ、面白い？」

「・・・凄く。」

「あ、そう・・・。」

その本はよほど面白らしく、唐木さんはこちらに目もくれずひたすらに読み耽っている。・・・しかし、戦乱時に休暇って・・・取ってる場合か？大体何の戦乱なんだ。

「あきらあつ!? まゝだゝつ!?」

いかん、お子様が駄々をコネ始めた。

「つと、とりあえず行ってくるっ! 何かあつたら携帯に!」

「・・・ん。」

唐木さんは、そのまま軽く手を挙げて、俺を見送った。・・・そんな面白いんだその本・・・。

3

「あつっ」

外は、真夏の炎天下。太陽の日差しが容赦なく、じりじりと皮膚を焼き付ける。蝉の声が暑さを更に引き立てているようだ。

「明、早く〜! 急がないとお店が逃げてくっ!」

逃げるか。

と、突っ込む気力すらこのむせ返る熱気に奪われる。マンションを出た瞬間に部屋に戻りたい衝動に駆られていた。

・・・このマンションは、もともと唐木さんが一人暮らしをしていたマンションだ。そこに何故、俺とイアクが転がり込むことになったかと言うと　話せば長くなる。詳しい話は割愛するが、ある事件をきっかけに、俺は唐木さんの護衛をすることになったのである。まあ、俺もどうせ一人暮らしのようなものだったし、家を空け

ていようが親が帰ってくることは滅多に無いし。

うちの親はそりやもうとんでもないくらいの放任主義で、エジプトで新しい文明遺跡が発掘されただの、やれ南極で凍り付けのナウマン象が発見されただのと世界中を飛び回っている。・・・そんな極楽とんぼを両親に持ったが故に、物心ついた頃には、絶対にあんな人間にはなるものかと、童心ながらに誓ったものだが。俺が平凡をこよなく愛する理由の確実な一つがそれである。

・・・そういえば、誕生日会を開くと言っておきながらその当日、多数の友人を招待しておいて、南米でインカ帝国の遺跡が見つかったとか言ってそのまま飛んでったこともあったな・・・あの時の惨めさと、友人たちの乾いた慰めと無理矢理な作り笑顔が、今も強く心に染み付いている。

・・・ま、まあそんな理由と、イアクの強引な発案で、唐木さんの家に転がり込むことになったのだ。

もちろん俺は反対した。いくら護衛の為とはいえ、女の子のマンシヨンに転がり込むなど・・・言語道断だ。

それは唐木さんも普通そう思うだろうと思っていたのだが・・・あろうことが、これがまたやけにあっさりと承諾してしまった。そりやまあ、俺とイアクは断片を探していて、その断片の一部が唐木さんを狙っているとなれば、利害は一致している、しているんだけど・・・それとも何か。俺が常識だと思い込んでいたそれは実は間違いで、寧ろイアクや唐木さんの感覚のほうが常識だというのか。

いや、断じてそれは無い！自慢じゃないが、俺は筋金入りの小市民だ。イアクの魔の手が忍び寄るまでは、俺はこの世知辛い世の中で、常に極一般人であろうと心がけた。そうして身に付けた必要以上の一般常識が、あんな物理法則を完全に無視した非常識な生物や、あの何を考えているのかすら解らない黙殺娘に劣るなど、有り得ない、いや有ってはならないのだ！！

・・・話は大幅にズレたが、まあそんなこんなで、この非常識な共同生活が始まり、今に至るといいうわけなのである。

「明〜っ！ほら、コンビニコンビニ！」

そうこうしているうちに、マンションから一番近い場所にあるコンビニ、「パーソン」に着いた。しかし、あれだな。たかだか歩いて10分程度とはいえ、この灼熱地獄の中だと想像以上に体力が削られる。

「早く早く！アイスアイス〜！！」

・・・こいつ、マジで単なる子供だったりするんじゃないだろうか？それにあの体力・・・やっぱり、神様というのは暑さを感じなかったりするんだろうか？・・・などと一瞬考えたが、そういえば子供はどれだけ暑くても元気に遊び回ってるのを思い出し、やはりイアクがお子様なんだという結論に至った。

店に入ると、そこは正に砂漠のオアシスだった。エアコンのよく効いた店内は、外の灼熱地獄に比べると天国。寧ろ寒いと感じるくらいだ。

イアクと言えば、店内に入るなり、速攻でアイスが陳列してある業務用冷凍庫にしがみつくようにして物色し始めた。・・・この様子だと放っておいても当分は離れそうにないな。俺はイアクを放置して、雑誌のコーナーへと赴いた。

最近のコンビニには何でも揃っている。日用品から食料品、文房具から雑貨に至るまで、生活に必要な物資は大方手に入る。まあ、量販店に比べれば若干値は高いが、飲み物や嗜好品、こういった書籍や雑誌程度ならほとんど問題ない。俺も書籍店なんかには滅多に足を運ばないし、普段読むような本も漫画雑誌くらいのもんだ。

適当に雑誌のよく読む漫画やコーナーだけを立ち読みして、時間をもて遊びかけた時、ふと目についた本があった。

「欧州心理学」アス 口球団偏」。

・・・なんだこれ？欧州心理学つてのもよく解らないが、サブタイトルに伏せ字が入ってるのはどういうことだ？それに心理学とアトロ球団に何の関係があるというのか。・・・この、妙にシニールな書籍のタイトルに、俺の心は奪われた、いやそれはもう釘付けだった。・・・内容を確かめるには至らなかったが。これはもしかしたら、唐木さんが喜ぶかもしれない。そう思い、俺は書籍をカゴの中に入れた。

「あきら〜！！これこれ！」

どうやら、イアクのほうも決まったらしい。何やら嬉しげにアイスの袋を幾つか下げてきた。

「・・・なんだこれ。」

そこには得体のしれない名前のついたアイスらしきものが。

「へへ、こつちが『秋刀魚アイス』、んでこつちが『サバ味噌煮かき氷』、そんでこれが・・・じゃじゃ〜ん！『ドクダミ茶シャーベット』！！・・・うわ、これって全部限定発売だからどこの店でも売り切れだったんだよね。まさかこんなところで見つかるなんて・・・コンビニ、侮りがたしっ！」

・・・マジか？いやそれ以前にお前の味覚つつかセンスはどうなってるんだってツツコミはさておいて、何よりそれが発売してんだ？限定発売つてもチャレンジャーだが限定しないとマジで潰れるぞその会社、とか脳内を膨大なツツコミデータが回り回ったあげく、俺の一言は全く違った質問になっていた。

「・・・あー、ところで、唐木さんに食われたのはどれだったんだ

「？」

「え？この『サバ味噌煮かき氷』だけど？」

・・・唐木塔子、侮りがたしっ！

結局、その三つのアイスと俺が選んだ本、それとイアクの執拗な駄々コネ攻撃にあい、仕方なく牛乳プリンを三つ買い、家路についた。どうでもいいがプリンだけじゃないか、まともな買い物。

4

「たっただいま〜〜〜！！」

イアクの上機嫌な挨拶で、俺たちはマンションに帰ってきた。・・・しかし、帰りは更に暑かった。冷房で冷えた身体には一瞬だけ外の炎天下は心地よかったが、それも一瞬だけ。数分しないうちに汗が吹き出し、体力がどんどん削られていった。

「ふい〜・・・あっちい・・・。」

俺は買い物袋をリビングの机の上に置くと、エアコンの冷氣で冷たくなったフローリングの上にへたりこんだ。・・・うん、気持ちいい。

「・・・おかえり。」

ズレたタイミングで唐木さんの挨拶。・・・って、まだその本読んだのか。あ、そういえば・・・。

「トーコ！！これ見て見て！！限定発売のアイスっ！！みつけたんだよ〜！」

・・・やっぱそれ、食うのか。

「あたし『秋刀魚アイス』ね！で、トーコはこれっ！『ドクダミ茶シャーベット』っ！それからこっちは・・・。」

「俺は要らん。食うなら二人で食え。」

「え〜！？でもこれ限定発売なんだよ？今じゃなきゃ食べられないんだよ？」

・・・できれば未来永劫口に入れたくない。

「トーコもおいしいって言ってたし！ね〜？」

「・・・うん、絶妙。」

その絶妙ってコメントが余計恐いんだよ！

「とにかく俺は食わん。俺のことは気にせず二人でやってくれ。」

「も〜、せっかく買ってきたのに・・・いいもん、二人で食べるから！あとでほしいって言ったってあげないんだからね〜だ！」

そっぴいながらアイスの袋を開ける二人。・・・どーでもいいが、買ってきたのに〜、ってそれは俺の金だってこと気にはしてないんだろっな・・・。まあ別にいいんだけど。

「……。」

「ひゃゝ、冷たゝい……おいしゝゝい!!」

「……マジでか?……やっぱりイアクの味覚はゴッドクラス（神级）だったか……（ある意味）。」

「……むぐむぐ……。」

あ、唐木さんも口に入れた。

「……。」

うわっ……すげー幸せそーな顔してる……。初めて見るぞ唐木さんのこんな顔……。

「おいしーねー! トーコ!」

「……。（コクコク）……超、絶妙。」

……やはり、この二人の味覚は同レベルか……。こりや気をつけないと、そのうちとんでもないもんを食わされそうだな……。二人はそのあと、アイスを三本ともペロリと平らげた。イアクは満足したのかソファーに丸まってやすやすと寝息を立て始め、唐木さんは読書の続きを再開し、俺もぼけーっとまどろんでいた……。うん、平和だ。こんな時間がずっと続けばな。なんて考えながらふと思いついた。

「あ、そうだ。」

俺はさっきのコンビ二袋から、ガサガサと例の本を取出し、唐木さんに差し出す。

「これ、唐木さんに。」

俺の手に持った本を目にしたとたん、唐木さんの目の色が変わった。

「・・・・・・・・・・。」

読んでいた本をパタンと閉じ、差し出した本をじーっと見つめる唐木さん。・・・その表情には、先程以上に「喜」が滲み出ている。・・・知らなかった、唐木さんって、結構分かりやすいんだ。

「・・・・・・・・これ、もらって・・・・・・・・いいの・・・・？」

なんていうんだろう。「おあずけ」をくらった飼い犬が、よだれを垂らしながら主人の「よし」を待っているような・・・いや、実際には涎は垂らしてないんだけど、そんなオーラがフツフツと感じられる。

「あ・・・・・・・・い、いや、コンビ二で立ち読みしたら、面白そうなのを見つけたから・・・・もしかしたら、唐木さんが喜ぶかなって。」

俺が本を手渡すと、何やら宝石でも扱うようにキラキラした目で表紙を見つめ出した。

「・・・・あの、唐木さん？その・・・・もしかして、その本、凄く欲しかった・・・・とか？」

「・・・・・・・・（コクコクコクコク）。」

俺が訊ねると、唐木さんは首が折れんばかりにうなづいて見せる。
・ ・ ・ もしかして、イアクと唐木さんって、物凄く似てるんじゃないかなろうか。

唐木さんは一通り本の表紙を満喫したあと、俺のほうを向いて、目を輝かせたまま、一言。

「・・・死んでもいい。」

「あ・・・あはは・・・喜んで貰えて、良かったよ・・・。」

いささか、今の状況において「死んでもいい」はあんまり洒落にはならなかったが、まあなんていうか、たかが985円（税込）でここまで喜んで貰えるなら、安いもんだほんとに・・・。

その後、唐木さんは何度も何度も本の表紙を嬉しそうに眺めた後、結局大事そうに胸に抱えたまま、先に読んでいた本の続きを読み出した。

結構可愛いところあるな・・・なんて思いながら、フローリングに座り込んで俺も自分の漫画本を読んでいると、段々眠気が襲ってきた。

こんなところで寝ると風邪ひくな・・・とか考えながら、眠気を払おうとしたが、そこはそれ、俺の微力な精神力では、睡魔という強大な魔王には、やっぱり勝てるはずもなく。

・・・そのまま俺は、安眠の底に落ちていった。

．．．う．．．。

．．．うゝん、なんか、重い．．．。

何故か俺は息苦しさで目を覚ました。

．．．そうか、リビングで漫画読んでそのまま．．．。今、何時だ？

起き上がろうとして、異常に気付いた。

「．．．すー．．．。」

「．．．くう．．．くう．．．。」

．．．はい？

俺の胸の辺りに、何か乗ってる？それも二つ。

「．．．すー．．．すー．．．。」

「．．．くう．．．ん．．．むにや．．．。」

．．．．．。

．．．俺は、寝呆けた頭を出来る限りフル動員し、考える。

．．．乗っているものは、二つ。それも、寝息をたてるような生き物。俺の近くで寝息をたてて寝るような生き物といえば．．．？

．．．．．。

．．．やっぱ、二人しかいねーよなー．．．。

イアクはともかくとして、多分俺が寝てる間に唐木さんもうたた寝を始めたんだろう。でもエアコンがつけっぱなし。それで、寝呆け

たまま暖かい場所を探して・・・。

・・・ってこの二人は動物か？でも考えてみたらイアクは猫で唐木さんは犬っぽいよな・・・ってそうじゃない！この状況は色々とヤバイ！いや、もう、色々と！なんとか抜け出さないと！！

俺は二人を起こさないよう抜け出そうとして、ゆっくりと動いてみたが、左右から二人に枕代わりにされているため身動きが取れない。そうこうしてるうちに、暖かさも加わってまた眠気が襲ってきた。

・・・このまま寝たらえらいことになるぞお・・・。と一応抵抗してみたが。

それもまた、俺の薄弱な精神力でどうにかできるわけもなく。

ま、いいかあ。

などと、結局夜になって腹を空かせたイアクに叩き起こされるまで、平和で幸せな眠りを続けたのであった。

続

く深きものども　前編

それが、彼女にとってみれば運が良かったのか悪かったのかは解らないが。

だが、有り得てしまった。ギリギリのラインで日常を保っていた彼女の人生は結局、その存在によって幕を下ろした。　いや、本当はすでに、次の幕はとくに上がっていたのかもしれないが。

1

俺たちは相変わらずな毎日を送っていた。夏休みに入り、あれ以来何事もなかったかのように出現しない断片の欠片に若干の肩透かしを食らいながらも、なんとなく長期休暇を平和に過ごしていた。時折、イアクのヤツがなにやら妙な食品なのかジョークアイテムなのか分からないような代物をどこからか手に入れてきては俺に食わせようとしたり（本人は美味いと思っているのだから、悪気は無いんだろう）、唐木さんは相変わらず飽きもせずシユールなタイトルの書籍を読み漁りつつイアクをからかって遊んでみたり（いや、もしかしたらこれも悪気はないのかもしれないが）、まあなんというかすでに当たり前と化した日常をのんびりと過ごしていたわけである。そんな、もう夏休みも中盤に差し掛かったある日。

「あきらあきらあきらあきらーーーーーっっっ！……！」

・・・もう、毎度お馴染みとなってしまうたお子様イアクが騒々しく俺を呼ぶ声。・・・ったく、今度はなんだ？ゴツド味覚（命名、俺）には付き合えんぞ？

「あきらあつ!!これ見てよこれっ!!」

これも毎度のことであるが、イアクは何やら大事のように何かを俺に見せる。まるで鼠を捕ってきた猫の如く。

「・・・んあ& a m p ; # 1 2 3 1 6 ; ; ? なんだってんだよまったく・・・。」

イアクが差し出したものは、俺の予想に反して、意外な代物だった。

「・・・なんだ?四名様、ご招待・・・?」

「・・・つふつふつふ・・・どうどうっ!?!?すごいでしょ& a m p ; # 1 2 3 1 6 ; つ!?!?商店街の福引きで当たったのよーっ!?!?」

それは、『南の島探険ツアー!三泊四日、四名様無料ご招待券!』
なんていうアリガチなタイトルで括られた、チケットだった。

「ほほう・・・。」

「ねっ?ねっ?すごいでしょ?しかもこれ、一発で当てたんだよ!?
?誉めて誉めてー!?!?」

・・・『南の島』なんて微妙なタイトルが気にはなったが、場所が
なんであれタダで旅行が出来るなんて話は確かにオイシイ。俺は、
珍しくまともなニユースを持ってきたイアクを誉めてやることにす
る。

「ふむ。でかしたイアクっ!お前はやれば出来る子だと信じていたぞっ!?!?」

「えっへへー」

言いながら頭を撫でてやるとお子様はご満悦の表情。・・・どうでもいいが、最近ますます猫化してきてるぞお前。

「それはそうと、これ四名様って書いてあるが、俺とお前、唐木さんと・・・あと一人はどうするんだ？」

「うーん・・・別に三人でもいいんじゃないの？他に連れてくようなの、居る？」

・・・いやまあ、居ないことも無いんだが・・・。

「唐木さんは行くだろ？誰か、他にいない？友達とか。」

そついや、唐木さんに俺以外の友人が居るって話、聞いたことないな。・・・まあ、あれだしなあ・・・。クラスでも多分あの様子に違いない。

「・・・連れて行っていいなら・・・居ないことも、無い。」

マジでか？

その瞬間、俺の興味は旅の内容よりも、唐木さんの友達のほうに引かれた。この黙殺娘とまともに会話出来る人間が他に居たとは・・・多分、俺はそいつと気が合うに違いない。・・・いや、待てよ？もしかしたら唐木さんにそっくりで、二人してひたすら読書ばかりしてるような間柄なのかもしれん。そこに会話は不要だよな・・・。

などと勝手な想像を色々としているうちに、唐木さんはイアクに引

っ張られて買い物に出かけたり、俺は俺で先に夏休みの課題を仕上げちまおうなどと考えて机に向かったりしているうちに何日か経ち、あっという間に旅行の当日がやってきた。

2

「とまあそういうわけで空港にやってきたわけだが。」

俺は隣でなにやらゴソゴソと嬉しそうに荷物を漁るイアクに

「なんだその大掛りな荷物はっ!？」

「え？」

イアクが手にしていたのは大きなボストンバッグに、これまたデカイ、リュックサック。更に手には紙袋が二つ。

「たかが三泊四日の旅行に何故そんなに荷物が必要なのかっ!？」

「だって南の島よっ!？何があるかわかんないじゃん!！」

何かあったって・・・大体、『裁定者』のイアクに必要な何かって、ナンだ？着替えはともかくとして　まさかっ!？

「・・・お前、もしかして中に・・・お菓子やらなにやら詰め込んでんじゃないだろうな？」

「そうよ？だって、もし遭難でもしたらしばらく食べられないくなっちゃうじゃない？」

・・・ああ、頭痛い。

呆れたが、言うだけ無駄なのは必要以上に解っている。・・・とりあえず見なかったことにしておこう。

「・・・それにしても、唐木さん遅いな・・・。」

例の友人とは、駅で待ち合わせをしているらしい。俺たちは先にバスで空港まで来た。俺たちが着いてからもう三十分ほど過ぎる。そろそろ来てもいい頃なのだが・・・。

「・・・ごめん、遅くなった。」

現れたのは、唐木さん。そしてその後ろには

「う、ごめんなさいっ！私の支度が手間取っちゃいまして遅れちゃったんです！その、あの　ごめんなさいっ！」

何やら、ペコペコと頭を下げるポニーテールの少女が。・・・どうやら、想像と違い結構まとまな子らしい。

「　あ&#12316；、そんなに待ったわけじゃないし、第一無理に誘ったのはこっちなんだしさ。気にしないで？ね？」

「　い、いえっ！こちらこそ、このような場にお誘い頂いて誠に恐悦至極というか、あの、えと、あ、ありがとうございました！！」

・・・前言撤回。何やらやはり、テンパリ加減に若干不安が残る。
・・・まあ悪い子じゃなさそうだけどさ。

「あはは・・・俺は向井明。こっちはイアク」

とまで紹介して、一瞬考えた。・・・どう見てもこいつは日本人じゃないよな。深く突っ込まれたらどうしよう。インドネシアからの留学生とでも

「は、はいっ！イアクさんが福引きでチケットを当てたんですよ？
この度はお招き頂きありがとうございます！」

要らぬ心配だったようだ。彼女は、何の疑心もなくイアクに頭を下げて挨拶している。・・・もしかして、この世でこんな細かいことを気にするのは俺だけなのかもしれんと、本気で疑うようになってきた。

「私、藤堂遥って言います。よろしくお願いしますね！」

とまあそんなわけで俺たちの乗る飛行機が到着して、出発してきたわけである。・・・途中、イアクの荷物が全部乗らなかったり、藤堂さんの荷物が何故かチェックで止められたりと、まあ多少のハプニングはあったが。・・・なんとか無事に出発できただけでもよししよう。

3

白い雲。照りつける太陽。そして、テレビでしか見たことのないような原色のハイテンションな植物たち。

航空機に乗って、たった二時間足らず。俺たちは、南の島、『三重山島』に到着していた。

「ウミウみ海い~~~~っ!!!」

イアクは到着後、荷物をバンガローに置くと、さつさと水着に着替えて飛び出して行ったようだ。・・・まあ、今ばかりはイアクがハイテンションになる気持ちもわからないでもない。南国的な雰囲気は、こうなんというか、それだけで妙にテンションを引き上げてくれる。商店街の福引きらしく、宿泊施設は簡素なバンガローだったが、まあその辺りは大して気にもならん。これで逆に豪華なホテルだったりした暁には、何か裏がありそうで余計怖い。

・・・あー、しかし、なんだ。なんでこういうことになるのか。

「ええっ！？部屋、一つなんですかつ！！？？」

・・・そう、俺たちが泊まる為の宿泊施設には、部屋が一つ。・・・いわゆる、家族部屋というやつなのだ。・・・まあ、四名様という人数設定で、それが「一般家庭」をターゲットとしたツアーだと気付くべきではあったのだが・・・。

「あー、心配しなくていいよ、藤堂さん。俺、ちょっと一人部屋が空いてないか管理の人に聞いてくる。多分俺一人くらいならなんとかなるだろ。」

多少、懐に痛い仕方ない。まあバンガローを借りるくらいの金額ならどうとでもなる。

イアクと唐木さんだけならともかく、藤堂さんも一緒となると四人部屋に男である俺が泊まるわけにもいくまい。そこらへん、藤堂さんに関しては常識が通用するみたいだ。・・・よかった、一応今のところ俺は一般常識を間違えてはいなかったらしい。・・・正直、最近では自信がなかったからな・・・。

そんなことを考えつつ、管理室へと赴いたのだが・・・。

「・・・満室、ですか・・・。」

結局、部屋は空いてないらしく、どうしようもなく帰ってきたのである。

「あ、でも俺泊まるここは見つけたから。ほら、あそこに食堂あるだろ？あの店、夏の間は夜中も開けてるらしいんだ。だから俺、夜はあそこに泊まるよ。事情を話したらそこのおばさんも快く承諾してくれたし。」

これは事実だ。なんなら夏の間ずっと居ると引き止められたほどである。・・・さすがにそれは丁重にお断わりしたが。

「つそ、そんないけませんですっ！いや、えと、私はその向井さんさえよろしければ。」

「え？いや、だってさすがに女の子ばかりの部屋に俺が泊まるわけには。」

「ダメなんですっ！！ 私のせいで向井さんに不自由な思いをさせないといけないなんて、そんな、せつかく誘って頂いたのに私、申し訳なさ過ぎて　　っ！」

・・・ああ、確かにそうか。俺としては気を使ったつもりなんだが・・・確かにそれでは藤堂さんが気に病むことになってしまう。どうやらこの子は必要以上に気負う性格らしいし・・・。

「・・・分かった。じゃあ遠慮なく俺も泊まるけど・・・ほんとにイヤだったらちゃんと言ってくれな？さっきも言っただけど、あの食堂のおばさん、かなり良い人でさ、喜んで了承してくれたんだから。」

「

「 は、はいっ！！ふ、ふつつかものですが、どうぞよろしく
おねがしまっ つく！？」

・・・おいおい。

色々と突っ込むところは山積みだが、俺たちはせつかくの南の島を、
とりあえず心行くまで堪能することにした。

まずは海。さすが、南の島。空の青を映して透き通った海水はどこ
までも、純粹に綺麗だった。

元気にはしゃぎ回るイアクと、普段よりも機敏な動きの唐木さん。
落ち着きはないが、三人の中で見かけは一番大人っぽい藤堂さん。

・・・よくよく考えてみると、外見的には三人とも甲乙付けがたいほ
どの美少女だ。

・・・俺はもしか、ものすげーシチュエーションを満喫しているの
ではなかるうか？・・・杉山、すまん！

しばらく、三人がはしゃぎ回る姿にほげーっと見とれてしまってい
た俺だった。

く深きものどもく 中編

5

結局その日は、陽が沈むまでビーチで遊んでいた。

背中が陽に焼けて熱い。夜になると、気温は高いが湿度が低い分、割りと涼しく感じた。

「ねーねー、明日はいよいよ秘境探検だね？ 秘境ってどんなかな？ やっぱり動く石像とか謎のピラミッド遺跡とかあんのかな？？」

例の食堂で夕食を摂りつつ、イアクが期待に満ちた眼で聞いてくる。

お前が一番未知の生物だろ！

・・・とツツコミたい気持ちをもぐつと堪えて、曖昧に返事をする。

「・・・さあな。 それより、それって確か、ボートで近くの島まで行くんだろ？ ツアーってのに添乗員も居ないし、俺たち以外のツアー客も居ない。 ってことはボートは貸し切りなんだよな？」

イアクはパンフレットをまじまじと見つめ、

「 そうみたい。 近くの港からボートに乗れるって。 あ、でも。」

とまで言つと次は藤堂さんが

「 現地集合って、どういふことなのでしょう？」

現地集合？・・・現地つて　　もしかしてっ！？

「　　ちよいパンフ貸せイアクっ！！」

イアクからパンフレットを引つたくと、よくよく目を通す。

「　　『　島への交通手段は各自用意してください』　いいっ！！
？？」

なんだそれ！？ツアープログラムじゃなかったのかよ！？

「・・・島までは自分たちで自由に。」

唐木さん・・・あんたもしかして始めっから気付いてた？

「　　あ、そっか。だったら別に行かなくてもいいってことだよな。」

『え~~~~っ！！』

俺の指摘に、イアクと・・・何故か藤堂さんまで不満の声をあげる。

「　なんでなんでなんで~~~~っ！？行こうよお~~~~！！あたしこれ楽しみにしてたのよ~~~~っ！？」

「そっ、そうですよ！！秘境ですよ秘境！？謎に満ちた島・・・大自然の神秘・・・これだけは絶対に行くべきだと思いますっ！！」

いや、まあイアクは諦めるが・・・藤堂さん、あんたまで？しかも、そこまで言い切る？

「いや、だってこれ、ボートに港から乗れるとは書いてあるけど詳しい記載が一切ないんだぜ？　この調子だと、ボートを出してくれる人まで探せつてことかもしれんぞ？大体、そんな秘境がほんにあるなら観光客なんか簡単に近寄れるわけがないだろ。」

そう、これがそんな大層な島なんだつたら、多分船の便などまず出ていないような無人島なのだろう。でなけりゃ、別料金と書かずに『交通手段は各自用意』なんて記載するわけがない。・・・まあ仮に別料金だとしても、ツアータイトルに練り込んでるのに別料金な時点でアレな匂いがプンプンするんだが。

「やめときなっ！」

その時、声を荒げて割り込んできたのは、食堂のおばちゃんだった。

「あの島は、悪いこと言わないからやめときな。多分あんたたちが言ってるのは『赤煙島』だ。あそこは、昔っから化け物が住み着いてるって言われててね・・・まあ、そんなもんは居やしないとは思っけど、あの近くは潮が渦を巻いてたり、流れが早かったりで土地の漁師だって滅多に近づかないんだ。毎年、命知らずの馬鹿があのにまで船を出して、渦に飲まれたんだかなんとか知らないが必ず行方不明になるんだよ。死体どころか船の残骸すら見つかりやしない。」

・・・化け物の住み着く島？

この時俺は、おばちゃん言葉が妙に気に掛かった。少し前までの

俺なら、こんな話は気にも止めなかっただろう。化け物など居るわけがない。・・・そう信じて疑わなかった頃の俺だったら。

「・・・。」

「・・・。」

イアクと藤堂さんは、さすがにおばちゃんの本気の忠告に黙ってしまった。・・・イアクは、何かを考えているような顔をしている。

「・・・と、いきなりごめんよ。代わりと言っちゃなんだが、あたしの知り合いに腕のいい漁師が居てね。明日はみんなで釣りなんてどうだい？なんだったら」

厳しい表情を和らげて、おばちゃんが出した提案に藤堂さんは食いついたようだ。

・・・しかし、何かが気に掛かる。無人島。誰も近づかない島。化け物の噂。行方不明者。

死体が見つからないってのも気になる。船ごと沈めばそりゃ死体も上がらないだろうが、残骸すら見つからないってのは行き過ぎだ。いくら渦に吞まれたにしても人間の体が有機体である以上、死ねば大概はガスを発生させるため一度はどこかに浮かび上がるだろうし、浮かび上がる場所がどこだか分からないにしても搜索すれば船の残骸くらいは見つかるはずなのだが・・・。つまりは、船ごと丸々消えちまったってことになる。・・・そんなのは不自然だ。俺は後でおばちゃんに詳しく聞いてみることにした。

「　　ってことでいいかい？」

「　　はいっ！あ・・・でも、いいんですか？その漁師さん、ほ

「ほんとに全部無料なんて」

「あつはつは！いい若いモンが、そんなこと気にするんじゃないよ！・・・なんて言いたいとこだけどね、最近はこちらもめつきり観光客が減っちまってさ。どうせ漁ったって自分らの食べる分を細々と取ってくるぐらいだ。ついでにあんたら四人くらいがついてったって気にもならんだろうさ。それどころか、多分若い子たちを目の前にしていつも以上にはりきるんじゃないかね、あのじいさんは」

「漁師さんって、おじいさんなんですか？」

「ああ、源吾郎じいさんつつつてね。まあここいらじゃ結構名の通ったベテラン漁師だよ。変わりモンで口は少々悪いが、腕は確かだし気はいい。酒を呑むと少々愚痴っぽくなるがね。あつはつは！」

「聞こえとるぞい！」

藤堂さんとおばちゃんの会話に乱入してきたのは、白髪頭に口髭をたくわえた、色黒の逞しい老人だった。

「あら、聞こえてたのかい？よかったじゃないか、まだ耳はもうろくしてないようだ。」

「フンっ！お前さんのデカイ声なら二十海里先でも聞こえるだろうよっ！」

「あつはつは！ー！そうだろうね！このじいさんが源吾郎じいさんだよ。な？変わりモンだろ？」

おばちゃんは、隠す様子もなくあつけらかんとそう言い放つ。・・・
おばちゃんも十分変わり者じゃないかと思っただが、なるほど、どちらも悪いヒトには見えない。

「釣りの件ならワシはかまわんぞい。まあ、その口煩いオバハンに無理矢理押し付けられたのは見てたが。それでもいいのなら明朝六時に、港に来りゃいい。今はちょうど沖にイワシの群れが回ってきておつての。追ってきたカツオやらシイラやらが腐るほど釣れるぞ。巧くすりゃカジキなんかも掛かるかもー。」

マジで？カジキって言えば、テレビなんかで見る体長が1mにもなる口のとんがった魚だ。うん、確かに楽しそうだ。

藤堂さんはすでに乗り気だし、唐木さんは・・・まあ多分行くだろう。イアクが静かだったのが気に掛かったが、とにかく俺たちはその話をありがたく受け取ることにした。

「さあ、そうと決まったらあんたらは早く宿に戻って寝な。明日は六時だろ？夜更かしすると船酔いするよ！」

「あ、じゃあお勘定を」

と、財布を出そうとした俺におばちゃんは

「馬鹿言うんじゃないよ、金なんか取れるもんかい！どうしてもってんなら明日はたくさん釣ってきておくれ。その魚と引き替えてことにしようじゃないか。もちろん明日の晩飯もその魚次第だからね。気合い入れて釣ってくるんだよ？」

・・・おばちゃんは勘定を受け取る気はないらしい。一瞬は躊躇っ

たが、ここまで言ってくれてるんだ、逆にお金を払うのが失礼に思えて、俺は一言だけ、

「じゃあ、お言葉に甘えて。ごちそうさまでした、すっごく美味かったです！」

とだけ言うと、おばちゃんは上機嫌で笑って、明日も来いと言って見送ってくれた。

7

「いい人たちですねえ。」

帰り道、藤堂さんが嬉しそうに言った。

「・・・ああ、うん。ちつとばかり強引な人だけだね。」

なんというか、確かに結構強引なおばちゃんだが、凄く暖かい人だ。漁師のじいさんも、とても気さくな人に見えた。

この町に住む人たちはみんなあんな感じなのだろうか。だとしたら・・・まだまだ日本も捨てたもんじゃないな、なんて考えつつ、都会じゃ絶対にお目に掛かれない満天の夜空を見上げながら、俺たちは宿への帰路を辿った。

バンガローに着くと、時刻はまだ八時過ぎだった。

唐木さんと藤堂さんは近くに露天風呂を見つけたとかで、着替えを用意して出ていった。俺も誘われたが、唐木さんが一言、混浴だよと口にして、藤堂さんがなにやらまたテンパリ出したのでとりあえ

ず謹んで辞退した。イアクは少し外で涼んでくると部屋を出たので、俺は一人を取り残されたわけだ。

・・・そういえば、食堂であの話聞いてから、イアクがあまり元気じゃないな。露天風呂なんて話、いつものイアクだったら一番に飛び付くはずなのに。

俺は、とりあえずイアクの後を追って外に出ることにした。

8

「おつ、いたいた。」

バンガローのある集落から道を挟んで脇に出ると、公園のような場所があり、ベンチにイアクが座っていた。

「・・・どしたの？明。」

さっきはそこまで気付かなかったが、どうやらイアクにいつもの覇気がない。

「どうしたはこっちの台詞だ。・・・元気がないぞ？なんかあったのか？」

いつもなら憎まれ口の一つでも吐いてくるイアクだが、今は妙におとなしい。・・・もしかして、あの『赤煙島』の話からか？化け物が出るって　まさか？

「・・・ねえ、明は、楽しい？」

・・・断片の欠片のことを確かめようと思ったら、何やら神妙な面持ちでイアクが訊ねてきた。肩透かしを食らって、一瞬躊躇ったが、

俺は答えた。

「・・・楽しいぞ？どうした？お前は楽しくないのか？」

と、返した俺を見て、やはりイアクは真面目な顔で、答える。

「すー　　つごく楽しいよ。多分、あたしがこの世界に創られてから今までで　　この二カ月くらいの時間が、一番楽しいくらい。うん、そう。恐いくらい楽しいの。」

ならよかったじゃないか、と言おうとして、気付いた。イアクの顔が、楽しいなんて口にしながら、とても淋しそうに笑顔を作っていることに。

「・・・あたしはね。ずーっと、うん、それはもう気の遠くなるくらいの間、人間たちを見てきた。それはそう、例えるなら物凄く長い映画を、特等席で独り、ずっと観てるような感じかな。でもどんなに面白い映画でも、一日中観てたら飽きるよね？」

・・・まあそりゃそうだ。エンディングまでの話が長すぎて、どこで感動していいやら分からなくなるだろう。

「・・・でも、席を外すことは許されないの。特等席に座ることを許された選ばれた者なんだからーって。・・・そのうちにね、気付くの。ああ、あたしは映画を特等席で観る権利は与えられてても、あの画面の中で女優の一人になることは絶対に出来ないんだ、って。だって、映画は観客が居て初めて映画になるんだもの。観る人が居ない映画なんて、意味がないじゃない？それで解ったの。映画を作った人は、あたしに観せるために作ったんだなって。だからあたしをこの終わらない映画館に招待したんだなって。」

そこまで聞いて、イアクが何を言いたいか理解できた。いや、正しくは理解できたわけじゃない。だって俺はイアクの言う『映画の出演者』だ。アクターは観客を選んで演じてるんじゃない。台本の意図通りに演じてるだけなんだから。

「一つストーリーが終われば、また違うストーリーが用意されてるの。でも上映が終わった作品の出演者は、あたしが観てたってことすら知らない。だって演じきったらそれで彼らの役目は終わりだもの。彼らが観客側（こうち）に来ることは、絶対にないの。」

「イアク……。」

名を口にして、はつとした。……俺はイアクに何と言ってやれる？ と言えるばいい？

「……あは、でもあたしはね、やっぱりその映画が好きなの。そんでもって、映画の出演者も、全部好きなんだ。……だから、途中で投げ出さないで今まで観れてこれた。……だけど……。」

イアクは突然、表情を変えた。今にも泣きださんばかりの、悲しそうな顔。

「でも、あたしは今の、念願叶ってやっと出演者の一人に抜擢されたあたしの毎日を　捨てたくないって思ってる！ この楽しい毎日を、失いたくない！！……だけど、ダメなの。このストーリーが終われば、何も無くなるか、また観客に逆戻りか。……ねえ、あたしはどうしたらいい？ どうしたらいいの……？」

……俺は、思わず口籠もる。世界を救えば、平和な毎日が戻って

くる。少なくとも俺たちにとっては。

だが、イアクはまた元の・・・いや、仮に俺たちがその後も一緒に過ごせたとしても、『裁定者』であるイアクは、俺たちが寿命で死んだ後でもこのまま生き続けるんだ。

それは死ねない故の、永遠の螺旋。多分、これまでずっとイアクはそんな永久に近い時間を過ごしてきたんだろう。ただ・・・。

「・・・イアク。よく聞け?・・・神様・・・『クウルトウル』は何の為に俺たちを、この世界を創ったと思う?」

イアクは涙を溜めた眼を一瞬ぱちくりさせると、口を開いた。

「・・・何の為?・・・そんなの、気紛れに決まって」

「多分違う。ああ、これは俺の推測でしかないんだが。」

きつぱりと否定した俺を、また大きな瞳をぱちくりとさせたが、イアクは不思議そうに俺を見つめていた。

「『クウルトウル』は、時が経つごとに無気力・無感情になつてゆく自分を嘆いていた。まあそりやそうだ。『旧き盟約』とやらで他人との接触を拒んでいたんだからな。『個は個にして成らず』。要するに、寂しかったんだよ。多分な。独りは寂しいんだ。誰だつて。それに気付いたんだな、『クウルトウル』は。」

だからこの世界を創った。誰かに慰めてほしくて・・・だからこそ、『記憶』を集めようとしたんだ。独りじゃない『記憶』。それこそが力。なんだって出来る『力』こそが『記憶』って、そついうことだろ?」

イアクは瞳を大きく開いたまま、俺をぽかんと見つめていた。

「だからな？多分、この世界で、『記憶』　つまり、『願う』って力は多分何よりも強いと思うぞ？『クウルトウル』は、それが知りたかったんだ。だから、『願う力』を集める為に、自分とはまったく逆の、有限である『生物』なんてもんを創ったんだろ
うな。それを知りたいが為に。」

イアクは相変わらず俺の目を見据えたまま動かない。ハトが豆鉄砲を食らったような顔をしている。

「無限の中での願いはなんだ？無いものを求めるなら有限だろ？

じゃあ、俺たち人間は有限である以上　無限を求める。だけど、有限である故にそれは叶うことがない。　だから、『願う』ことしか出来ないんだ。強く強く　果たされないことであることほど、強く『願う』。　だから、お前が無限だということなら　」

一呼吸置いて、俺は、告げた。

「強く願えば、必ず叶うさ。お前の望むようにな。」

最後に告げた後、なんだか、俺は急に気恥ずかしくなって顔を背けた。イアクは何も言わない。・・・まだ、泣いてるのか？

「　ぶっ　」

・・・ん？なんだ？今のは？

[illegible]

「……おい。なんか、いつぞやの記憶が蘇るぞ。デジャヴかこれは？」

「おい。」

[illegible]

くそう。またあんときの再現か？・・・しかし、よく笑うヤツだな
まったく・・・。

「
っひいっ
おなつ、おなかよじっ
ぷははははは

「ははははは！」

あーもういいや、いくらでも笑いやがれこんちくしょー！

「クウルトウルが、寂しがり屋？あはっ、あは、そんなこと言つたの、あ、あんたが初めてよ、ぷふっ、はは、あ。」

「．．．．．なんともいいやがねっ。」

俺は背中を向ける。・・・多分恥ずかしさで、俺の顔は真っ赤なんだろうな。

と、その時、背中に、イアクがもたれてきた。

「ありがとう。」

……一言だけ、消えそうに小さな声でそう呟いた。が、次の瞬間

「　　ってえっ!？」

思いつきり背中を叩きやがった!？

「　　あははっ！先に部屋に戻ってるわよ！そろそろトコたち
ちが帰ってくるだろーしー!！」

「お　　おいつ!」

そのまま、俺を置いてイアクはバンガローのほうに駈けていった。
俺は、ため息を一つついて、肩を下ろす。　　ま、どうにか元気が
出たみたいだ。別に　　何がどうってわけじゃないが、あいつ
が落ち込んでいるとこつちまで気が滅入る。

俺は、公園から見える海のほうを見た。今日は満月。夜の水面に
月が映って、揺れる。

・・・こんなに平和そうに見えて、最後の時間は確実に迫っている。

俺にしか出来ないというなら　　やってやる。世界を救うなんて
大それたことは分らないが、この平和を守る為には、やるしかない
んだ。

海に向かって祈る。

願わくば　　この平和な世界が、永遠に続きますようにと。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8321c/>

クルトウス ～碧槍の帝～

2010年10月9日07時35分発行